

再び詩歌<sup>しいか</sup>について

今回も国語の話です。私が前に校長をしていた足柄高校では、朝読書の時間というのがある。登校してきた生徒は、それぞれ自分の決めた本を、朝のHRが始まる前の10分間読み、木曜日の総合的な探究の時間でまとめや発表をしていました。朝からしーんとした中で、生徒が読書をする姿に感動した私は、読書を頑張る足柄高校の生徒にエールを送ってほしいと、赴任早々ある人に手紙を出しました。そのある人とは、私の教員採用の同期である「俵万智」さんです。

私の手紙は、出版社に勤務している友人を介して俵万智さんに届き、すぐに返事が来ました。手紙の中身については、校長室の前の廊下にコピーを掲示しておきましたので見てください。俵万智さんは「サラダ記念日」という歌集が大人気となり、教員生活との両立が難しくなって4年ほどで退職し、以降は歌人として何冊もの歌集を出していきます。最も有名な「サラダ記念日」はこんな歌です。

「この味がいいね」と君が言ったから七月六日はサラダ記念日

私はかつて、俵万智さんがまだ大学生の頃に書いて新聞に掲載された、短いエッセイを読んだことがあります。内容はあらかた忘れてしまいましたが、その何気ない日常を無駄のない洗練された文章に仕上げる技は、ただ者ではないなという感じでした。

さて、国語の学習で、短歌や俳句、そして詩について学ぶことはありますよね。この詩歌のどこがいいのか、何をメッセージとして伝えているのかなどを読み解くのは、時に難解で退屈だった記憶があります。あるテレビ番組で、芸能人の読んだ俳句を、専門家が手直ししながら採点するものがあり、「なるほどそうなんだ！」と思うことがあります。結局詩歌は自分でつくってみないと、なかなか理解が進まないところがありますね。

それにしても万葉集の時代から（いや、おそらくもっと昔から）延々と詩歌は詠まれてきました。漢文の学習では中国の漢詩（五言絶句や七言律詩）をやりますが、これにも古い歴史があります。そんな豊かな文学の歴史を踏まえて、第二次世界大戦後しばらくしてから、詩人がたくさん活躍し、詩集が次々と発行される時代がありました。

戦後現代詩についての詳しい説明はともかく、思いつくままにそのころに活躍した詩人をあげると、川崎洋、吉本隆明、吉野弘、石垣りん、谷川俊太郎、大岡信などがいますが、このとき「戦後現代詩の長女」と呼ばれたのが、茨木のり子さんでした。

「別冊NHK100分de名著 読書の学校」というシリーズがあって、その中に「若松英輔特別講義『自分の感受性くらい』」という本があります。教科書にも掲載されている茨木のり子さんの「自分の感受性くらい」という詩を題材に、いろいろなことが語られています。私が「校長室より33」書いたプラトンの想起説についても、少し角度は違うけれど書かれています。

まずは茨木のり子さんという人について、簡単に紹介しましょう（谷川俊太郎選「茨木のり子詩集」岩波文庫より）。茨木は1926（大正15）年に生まれ、帝国女子医学薬学部専門学校（現在の東邦大学薬学部）に入学し卒業しています。卒業は1946年です。結婚後本格的に詩を発表するようになり、戦後現代詩の同人誌として有名な「櫛」（かいは）に参加します。

わたしが一番きれいだったとき  
まわりの人達が沢山死んだ  
工場で 海で 名もない島で  
わたしはおしゃれのきっかけを落としてしまった

これは「わたしが一番きれいだったとき」という茨木さんの誌の一節です。みなさんが今  
過ごしている青春時代を、彼女は戦争によって奪われた世代なのですね。そして夫を亡くし  
て2年後の1977（昭和52）年に「自分の感受性くらい」を含む詩集が発行されます。

ばさばさに乾いていく心を  
ひとのせいにはするな  
みずから水やりを怠っておいて

気難しくなってきたのを  
友人のせいにはするな  
しなやかさを失ったのはどちらなのか

苛立つのを  
近親のせいにはするな  
なにもかも下手だったのはわたし

初心消えかかるのを  
暮しのせいにはするな  
そもそもが ひよわな志にすぎなかった

駄目なことの一切を  
時代のせいにするな  
わずかに光る尊厳の放棄

自分の感受性くらい  
自分で守れ  
ばかものよ

私はこの詩を初めて読んだときに、なんだか年上の女性に励まされているような、叱られ  
ているような奇妙な感じでした。茨木さんを戦後現代詩の長女と呼ぶのは、そんな気風がこ  
の詩だけでなく、彼女の詩の随所に感じられるからかもしれません。

今回私が、俵万智さんと茨木のり子さんの二人をつなげて紹介したのは、この二人は共通  
して、人生の本質を射抜くような難しいことを、わかりやすく書いているように思えたから  
でした。でもさきほど紹介した若松英輔さんは、そうではないと言っています。「彼女は、…  
…本当のことは易しく書かなければ、この世の中に現れてこないということを、現代の私た  
ちに伝えている」のだそうです。